

2025年度 オンデマンド講義概要一覧

オンデマンド講座視聴プログラム（ビデオ・オンデマンド：VOD）

VOD 講座は、他大学の協力も得て、教育・研究の分野において、下記の内容で提供しています（1 講義約 45 分程度（約 15 分×3 パート））。

《オンデマンド講義概要一覧》

※講師の所属は、いずれも撮影時点での所属です。

分 野：「高等教育論Ⅰ」		テ ー マ：「現代の高等教育」
講師	金子 元久（筑波大学）	
到達目標	①日本及び世界の高等教育の状況を説明できる。（知識） ②大学教育改革の課題を説明できる。（知識） ③改革のメカニズムおよび教職員研修（FD・SD）について基本的な見方や用語を理解し、活用することができる。（知識）	
概要		
Part 1	1. なぜ大学改革か ①社会経済の変化と大学教育、②大学教育への負担構造のシフト、③焦点としての大学教育	
Part 2	2. 大学教育の現状 ①現代の学生と大学教育、②自律的学習時間の不足、③日本型学習の特徴	
Part 3	3. 改革への道とFDの課題 ①大学教育改革への課題、②改革のメカニズム、③大学教職員の役割とFD,SD	

分 野：「高等教育論Ⅱ」		テ ー マ：「高等教育研究史」
講師	舘 昭（桜美林大学）	
到達目標	日本及び世界の高等教育研究の沿革を説明できる。（知識）	
概要		
Part 1	高等教育の展開と高等教育研究 まず、高等教育概念の確認をする。高等教育研究の歴史は高等教育そのものの歴史と並行しているため、高等教育の歴史を俯瞰でき、それ自体が高等教育研究史上の金字塔とも言うべきトロウのエリート・マス・ユニバーサルの発展段階説の正しい理解を行う。	
Part 2	エリート段階の研究とマス化アメリカでの固有研究の発生 エリート段階は、広い意味での高等教育研究の発生の時期であり、それは高等教育論と大学史の様態を取って現れたこと、また、固有概念としての高等教育研究「高等教育を対象に、その政策や経営・運営に資する実証的、理論的研究の組織化された取り組みで、固有の学会や研究組織の形成によって顕在化したもの」が、逸早くマス段階さらにはユニバーサル段階へと移行したアメリカで発生し、展開したことを見る。	
Part 3	日本における展開と世界の状況－課題としてのユニバーサル化－ 日本における近代化にともなう大学論登場から、戦後の固有の意味での高等教育研究の発生と展開の状況の把握を行い、さらにはユニバーサル段階へと向かう世界の高等教育研究の展開状況や研究にからむ問題の把握を通して、研究史が投げかけてくる高等教育研究の方向性について考える。	

分 野：「高等教育論Ⅲ」		テ ー マ：「大学教育改革とFD」
講師	川島 啓二（京都産業大学）	
到達目標	我が国の大学教育改革の背景、経緯、特徴や、FD（ファカルティディベロップメント）の現状や今後を幅広い観点から考えるための基本的な見方や用語を理解し、活用することができる（知識・理解）	

概要	
Part1	「大学教育「改革」の始まりと展開」 大学教育の改革が強く語られるようになったのは、1991年の大学設置基準の「大綱化」以来である。それはより広い文脈で捉えれば、1980年代の新自由主義的な諸改革とその思潮が高等教育に及んできた結果であると理解できる。この流れは後に、国立大学の法人化といった大きな制度改革から、目標管理に基づく教学マネジメントに及び大学運営全般の構造的な改革となった。
Part2	「質保証体制の整備と確立」 大学教育改革の軸を構成してきた、90年代末からの主要な中教審答申の内容を概略し、規制緩和の流れが質保証の枠組み、すなわち、3つのポリシーと学士力や学習成果、さらには、内部質保証システムの確立へと収斂していった展開を解説する。また、新しい動きとして、高等教育のグランドデザイン（答申）における基本的な論点を整理する。
Part3	「大学教育改革とFD」 FD（ファカルティディベロップメント）とは何か。その基本的な理解から、大学教育改革の動きの中で、FDはどのように位置づけられそのような課題があるのかを明らかにし、大学教員の「専門性」を手掛かりとしながら、今後の在り方を探る。
参考文献	1. 文部科学省『平成29年度文部科学白書』 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201801/1407992.htm 2. 濱名篤他『大学改革を成功に導くキーワード30—「大学冬の時代」を生き抜くために—』学事出版、2013年 3. 東北大学高等教育開発推進センター編『ファカルティ・ディベロップメントを超えて—日本・アメリカ・カナダ・イギリス・オーストラリアの国際比較』東北大学出版会、2009年 4. 佐藤浩章他『大学のFD Q&A』玉川大学出版部、2016年

分 野：「高等教育論Ⅳ」		テ ー マ：「大学評価論」
講師	鳥居 朋子（立命館大学）	
到達目標	今日の大学評価の課題について、内部質保証の観点から述べることができる 内部質保証の実質化に向けて当事者意識を持つことができる	
概要		
Part1	1. はじめに：大学評価にかかわる取り組みの展開 -内部質保証と継続的改善の課題 -教学マネジメントとIR -全国的な動向。	
Part2	2. 立命館大学の取り組み -内部質保証システムの構築と運用 -教育プログラム・レベルの取り組み	
Part3	3.おわりに：内部質保証システムの運用と学習成果の可視化 -到達点と課題 -内部質保証の実質化への展望	

参考文献	<p>荒木俊博・山咲博昭（2019）「第3期認証評価受審時における使用データとIRの役割 -大学基準協会受審の2大学の事例から-」（事例報告）『大学評価とIR』第10号、大学評価コンソーシアム、pp. 29-44。</p> <p>大学基準協会編集（2019）『教育プログラム評価ハンドブック』大学基準協会。</p> <p>大学基準協会（2017）「大学基準」。</p> <p>羽田貴史・米澤彰純・杉本和弘編著（2009）『高等教育質保証の国際比較』東信堂。</p> <p>一般社団法人日本私立大学連盟教育研究委員会(2019)「私立大学における教育の質向上に関する取り組み～学習成果の可視化による大学教育の質保証～」 https://www.shidairen.or.jp/files/topics/2453_ext_03_0.pdf 2021.3.10 アクセス</p> <p>工藤潤（2019）「大学基準協会が定義する内部質保証とその評価のあり方」平成30年度大学評価シンポジウム配布資料2、大学基準協会、2019.1.28。</p> <p>岡田有司・鳥居朋子・村上正行（2020）「学部における教育情報の活用の現状と課題」大学教育学会第42回大会自由研究発表、6月7日。</p> <p>大場淳（2015）「フランスの大学の自律性と質保証」田川千尋編『グローバル化と高等教育：フランスを事例に』（未来共生リーディングス volume 8），大阪大学未来戦略機構第五部門，pp.11-26。</p> <p>Saupe, Joe L. (1990) The Functions of Institutional Research, 2nd edition. Tallahassee, FL: Association for Institutional Research.</p> <p>鳥居朋子（2020a）「立命館大学における内部質保証の取り組み-内部質保証システムの特質および課題を中心に-」『立命館高等教育研究』第20号、pp.1-15。</p> <p>鳥居朋子（2020b）「大学における教育の評価とマネジメント-内部質保証の推進課題としての捉えなおし-」『高等教育研究』第23集、pp.119-140。</p> <p>鳥居朋子（2019）「認証評価を受審して」『じゅあ』No.62、大学基準協会、p.5。</p> <p>鳥居朋子・杉本和弘編（2018）『高等教育における戦略的データ活用とリーダーシップ：国際シンポジウムの記録を基礎に（高等教育研究叢書 142号）』広島大学高等教育研究開発センター。</p> <p>Torii, Tomoko, Watanabe, Yuki, and Mori, Masao (2018) IR landscape in Asia: Global trends in practical issues and research topics, Poster Session, Association for Institutional Research 58th Forum, May 31, Orlando, FL, USA.</p> <p>立命館大学（2018）「点検・評価報告書（申請用）」。 http://www.ritsumei.ac.jp/file.jsp?id=413763&f=.pdf 2021.3.10 アクセス</p> <p>立命館大学大学評価・IR室(2020)「大学評価・IR室パンフレット」 http://www.ritsumei.ac.jp/assessment/assets/file/assessment_booklet05111.pdf 2021.3.10 アクセス</p>
------	--

分野：「高等教育論V」		テーマ：「高等教育政策：戦後日本の大学政策（転換期の大学政策、海外との比較）」
講師	川嶋 太津夫（大阪大学）	
到達目標	①戦後の日本における大学政策の展開と課題について理解する。（知識）	
概要		
Part 1	<ul style="list-style-type: none"> 戦後改革から高等教育計画の時代 旧制から新制大学への移行期の特徴、新制大学の急増、進学需要拡大への対応 	
Part 2	<ul style="list-style-type: none"> 大学改革-競争原理の時代～明治、新制に続く第3（平成）の大学改革～ 規制緩和と競争へ、高等教育政策策定過程の変化、事前規制から事後チェックへ、市場原理の評価 	
Part 3	<ul style="list-style-type: none"> 高大接続改革、マイクロマネジメント、少子化～平成から令和の大学改革の課題～ 高大接続改革の経緯と結末、大学教育のマイクロマネジメントの強化、少子化への対応 	

分野：「高等教育論Ⅵ」		テーマ：「初年次教育の動向： 成果につながる初年次教育とは」
講師	山田 剛史（関西大学）	
到達目標	① 初年次教育の最新動向を把握し、成果につながる初年次教育とは何かを再考する。（知識）	
概要		
Part 1	<p>日本では 2000 年頃から導入が始まった初年次教育が、四半世紀経った現在ではほぼ全ての高等教育機関で実施されるにまで至っている。その背景には、少子化に伴う高等教育機関の変化や社会を取り巻く状況の変化がある。近年の動向を鑑みると、「学習習慣が未確立」「目的意識の希薄化」といった学生の実態、「求められる新たなスキル」に関する社会的要請、学習指導要領の改訂に伴う「高校の新たな学びとの接続」などが挙げられる。初年次教育とは「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新生を対象に作られた総合的教育プログラム」と定義され、「大学生活への適応」「学問的スキルの育成」「キャリア形成支援」「社会的スキル・心理的支援」といった目的・類型が存在する。取組実態としては、「ライティング（文章作成）」や「プレゼンテーション（口頭発表）」といった学問的スキルの育成が多く、取組当初から最も急増しているのが「学内の教育資源の活用方法」に関するプログラムである。</p>	
Part 2	<p>初年次教育の成果を高めるためにも、どのような学生が入学してきているのか、どのような教育・学習環境にあったのかを把握することが重要となる。2014 年 12 月に高大接続の一体的改革の中教審答申が出されて以降、大学入学者選抜の改革をベースに高等学校教育の改革も進められることとなる。入学者選抜については、2021 年度からの大学入学共通テストの導入に加え、学校推薦・総合型選抜の増加や探究学習評価型入試の増加など、様相が大きく変わってきた。同時に、2017 年の学習指導要領の改訂によって、高等学校教育の改革も進められてきた。具体的には、資質能力 3 つの柱を育成するべく、主体的・対話的で深い学び（≡アクティブラーニング）の推進が掲げられた。加えて、2022 年度からは「総合的な探究の時間」（探究学習）の導入が図られることとなった。その一期生が 2025 年 4 月より大学に入学してくる。大学入学者は、探究学習を通じて、①課題設定、②情報収集、③整理・分析、④まとめ・表現といった一連のプロセスを経験しているため、それに応じた初年次教育を検討することが必要となる。</p>	
Part 3	<p>こうした教育改革の成果が現れるには当然相当の時間を要するもので、まだまだ途上にある。データを見ても、高校生の学びに対する意欲の低さや大学生の学びに対する受動性の高さには、相当の緊張感がある。この問題を打開することなしに、高等教育機関の質保証はなし得ないと言えよう。そうした中、高校での探究学習の効果や大学における初年次教育の効果を示すデータも出てきている。以上のように、初年次教育は高大接続や高年次接続の観点からも重要な意義を有する取組であるが、そのあり方は時代・高校・学生の変化に応じて見直される必要がある。これまでの初年次教育を見直し、再構築する時期に来ている。改めて、成果につながる初年次教育の実現に向けての重要な点を取り上げる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 位置づけ：DP・カリキュラムの中での位置づけ・目標を明確に 2. 実施体制：複数教員で対応するため持続可能なチーム編成 3. 学習支援：アドバイザー制度やアドバイジングとの連動 4. 連携機能：FD や学生支援部署（障がい学生、キャリア、学生相談）との連携 5. 効果検証：パフォーマンス評価や授業アンケート、成績分布の活用 	

分野：「教授学習理論Ⅰ／Ⅱ」		テーマ：「学生が主体的に学ぶための授業設計」
講師	栗田 佳代子（東京大学）	
到達目標	<p>(1) 教授学習に関する基本的な理論を具体的に説明することができる。（知識） (2) インストラクショナルデザインを基にして授業を組み立てることができる。（技能）</p>	
概要		

Part 1	<p>学生の学ぶ意欲を引き出すには？ ～目的・目標の設定とモチベーション理論～</p> <p>①目的と目標 ②モチベーション</p> <p>目的と目標の設定について、その内容や書き方について学ぶ。また、学生のモチベーションについて、期待・価値・環境という観点からよりよい授業づくりに活かすための方法について学ぶ。</p>
Part 2	<p>学びを促す授業設計 ～ADDIE モデルとアクティブラーニング～</p> <p>①ADDIE モデル ②アクティブラーニング</p> <p>授業づくりの理論である ADDIE モデル、アクティブラーニングについて学ぶ。ADDIE モデルを知ることによって授業の準備から、実施、評価までのサイクルを身に付けることができる。また、学生が主体的に学ぶためのアクティブラーニングについてその定義や具体的方法を知り、よりよい授業づくりに活かすことを目指す。</p>
Part 3	<p>授業設計の実際 ～ガニエの 9 教授事象を参考に授業を設計する～</p> <p>①ガニエの 9 教授事象 ②クラスデザインシート</p> <p>授業構成のポイントとして活用できるガニエの 9 教授事象について学び、最後に、これまでに学んだことをもとにデザインするためのツールであるクラスデザインシートの利用方法を学ぶ。この講座を学ぶことで、教授学習に関する理論をよりよい授業づくりに実際に活かすことを目指す。</p>

分 野：「教育方法論Ⅵ」		テーマ：「情報活用基礎 –ICT を活用した授業デザイナー–」
講師	中島 英博（立命館大学）	
到達目標	<p>1、大学における ICT*を活用した授業全体の設計や学習活動の設計の方法を知る。（知識）</p> <p>2、担当科目の中で、ICT を活用した授業の実施計画を立てられる。（技能）</p>	
概要		
Part 1	<p>ICT の発達により、授業の形態を教室での対面授業だけでなく、教室外から遠隔で参加したり、自由な時間に学習に取り組むといった形態が取れるようになりました。授業形態は授業の目的や学習者の特徴にあわせて積極的に選択できるようになったと言えます。ライブ型やハイブリッド型等の授業形態について、それぞれの授業形態の特徴と留意点を確認します</p>	
Part 2	<p>学生が知識を習得することを支援するために、ICT どのように活用するかを考えます。特に、基本の学習サイクルとしての内化・外化・内化のプロセスを確認し、ICT を活用した例として反転授業を取り上げます。ICT の活用により、個別学習の促進、理解度の確認、授業中の相互作用の促進を効率的・効果的に行う方法を考えます。</p>	
Part 3	<p>学生が修得した知識を活用したり発信する段階（外化）において、ICT を活用した授業例を取り上げます。具体的には、授業中の議論を ICT を活用して活性化する例を考え、情報共有ツールの活用とその際の準備や指示のポイントを確認します。</p>	

分 野：「授業設計論Ⅰ」		テーマ：「大学の授業の設計」
講師	沖 裕貴（立命館大学）	
到達目標	<p>①カリキュラムや授業の設計において、学習成果を明確にし、適切な到達目標を設定することができる（知識・技能）。</p> <p>②高等教育に求められる内部質保証の意義と必要性を説明することができる（知識・技能）。</p>	
概要		

Part 1	<p>「各学部・学科での観点別人材養成像（DP）の策定と公開」（スライド 1～15）</p> <p>①本講義の到達目標、②中教審答申から見えてくること、③ポロニャプロセスにおける学習成果、④内部質保証システムの構築、⑤DP、CP、AP とは、⑥DP と CP の明確化の方策、⑦「観点別」「学力の三要素」とは、⑧観点別人材用製造（DP）の例ー立命館大学産業社会学部、ハーバード大学コアカリキュラム、滋賀県立大学工学部電子システム工学科、⑨DP 策定の留意点</p>
Part 2	<p>「1. 観点別の到達目標」「2. カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー」（スライド 16～36）</p> <p>①到達目標と指導内容・方法、評価の関係（カリキュラム設計、授業設計：授業前）、②科目の観点別到達目標の例：山口大学「芸術論特殊講義」、「線形代数」（理系基礎科目）、全学共通教育科目一言語・情報教育科目ー外国語教育科目、③到達目標の思い違いとあるべき姿、④観点別到達目標作成の留意点、⑤観点別の到達目標の練習問題 1、2、⑥カリキュラム・マップ、ツリーとは、⑦カリキュラム・マップ例、カリキュラム・ツリー例：滋賀県立大学工学部（マップ、ツリー）、立命館大学文学部（マップ）、愛媛大学理学部（ツリー）、愛媛大学教育学部（ツリー）、宇都宮大学工学部（ツリー）</p>
Part 3	<p>「観点別到達目標ごとの成績評価基準」（スライド 37～59）</p> <p>①大学における成績評価に関する法令、②ルーブリックとは、③Rubric Template (Huba & Freed, 2000)、④パフォーマンス評価とは、⑤パフォーマンス評価の背景にある理論、⑥ルーブリック利用の注意点、⑦「現代の教育」レポート試験ルーブリック（沖）、⑧イギリスの大学の成績評価、⑨アメリカのプレゼンテーションのルーブリック、⑩ルーブリックの効果、⑪日本の大学教員の思い違い（私も含めて！）⑫パフォーマンス評価の実際の手順と実例、⑬参考文献・資料</p>

分 野：「教育評価論Ⅰ」		テーマ：「成績評価の意味と方法」
講師	鳥居 朋子（立命館大学）	
到達目標	<p>①授業の到達目標（行動目標）に沿って適切な評価方法と評価基準を設定できる。（技能）</p> <p>②教授方略、教授方術に沿って適切な学習成果の評価方法を検討し、開発（例：ルーブリック評価等）できる。（知識、技能）</p> <p>③自らの授業に関して客観的かつ厳格な成績評価と学習者への適切なフィードバックを心がける。（態度）</p>	
概要		
Part 1	<p>成績評価の方法と基準に関する導入</p> <p>大学の授業における成績評価の現状と問題点、「厳格な成績評価」の意味、成績評価の目的、成績評価の意義（教育的機能）、評価の対象（到達目標との整合性）、成績評価に求められる条件（妥当性、信頼性、客観性、効率性等）、成績評価の流れ、成績評価のタイミング（診断的評価、形成的評価、総括的評価）等について、いくつかの事例を示しながら解説する。</p>	
Part 2	<p>成績評価の方法と基準の設定をめぐる具体的な手法</p> <p>成績評価の方法（論述試験、口頭試験、客観試験、シミュレーション、実地試験、観察・記録法、論文・レポート）、成績評価の方法と評価可能な目標との関係（知識、理解、技能、態度等）、学習のプロセスや質を重視した評価方法（チェックリスト、ルーブリック）、絶対評価と相対評価、GPA（意義、算定方法、活用例）等について、いくつかの事例を示しながら解説する。</p>	
Part 3	<p>成績評価のフィードバックの方法及びまとめ</p> <p>成績評価の学生へのフィードバックの方法（授業のプロセス、授業終了後）、成績点の開示、学生からの成績申し立てへの対応等について解説し、最後に成績評価の基準と方法の設定に関するセルフチェックポイントを提示することによって講義のまとめを行う。</p>	

参考文献	1.池田輝政他『成長するティップス先生』玉川大学出版部、2001年 2.愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室編集『愛媛大学FDハンドブックVol.1 もっと!! 授業良くするためにーシラバス作成から成績評価までー第二版』愛媛大学、2007年 3.名古屋大学高等教育研究センター編『プロフェッショナルスクールのための授業設計ハンドブック』名古屋大学高等教育研究センター、2004年 4.北海道医療大学FD委員会編『北海道医療大学FDハンドブック 大学教育の設計』北海道医療大学、2003年
-------------	--

分 野：「教育評価論Ⅱ」		テーマ：「目標準拠測定に基づく評価」
講師	野嶋 栄一郎（早稲田大学）	
到達目標	①授業の目的にあった試験、課題等のあり方について理解する。（知識）	
概要		
Part 1	目標準拠測定と集団準拠測定 ①テスト得点の解釈における二つの立場 ②二つの測定の特徴	
Part 2	教育目標 ①ブルームによる教育目標の分類学 ②認知的領域のタキソノミー ③情意的領域のタキソノミー ④教育目標の妥当性と明確性 ⑤教育目標の記述	
Part 3	目標準拠テストの設計 ①テスト領域を定める ②学習内容の分析 ③教授目標の記述 ④コースアウトラインの作成 ⑤目標明細表の作成 ⑥達成基準の設定 ⑦テスト項目の記述	

分 野：「心理学Ⅰ」		テーマ：「青年期の心理」
講師	岡田 有司（東京都立大学）	
到達目標	①発達心理学の一領域である青年心理学の基礎的事項を説明できる。（知識） ②青年期における心の葛藤、発達課題を説明できる。（知識） ③指導する学生に対して、青年期の心理を理解した上で対応することを心がける。（態度）	
概要		
Part 1	青年期の発達と特徴①：青年期と自己 青年期は自己の形成において重要な時期である。ここでは、はじめに青年期の位置づけについて確認した上で、青年期における自己について、アイデンティティ、パーソナリティ、自尊感情の観点から概観する。	
Part 2	青年期の発達と特徴②：認知・対人関係・学校 青年は自己以外の様々な領域においても発達のな変化が生じる。ここでは、認知面での発達、対人関係における発達、学校教育を通じた発達について概観する。	

Part3	青年における多様性と大学 一言に青年といっても、様々な青年が存在する。ここでは、大学生に焦点をあて、心理的な問題を抱えた学生、障害のある学生、性的マイノリティの学生、留学生について概観し、多様な学生を包摂する際に重要な DEI の概念についても理解を深めていく。
参考文献	1. 無藤隆・子安増生(編) 2013 発達心理学Ⅱ 東京大学出版会 2. 白井利明・都筑学・森陽子 2012 やさしい青年心理学 新版 有斐閣アルマ

分 野：「心理学Ⅱ」		テーマ：「発達の原理と各段階の特性」
講師	西垣 順子（大阪市立大学）	
到達目標	①発達と成長の原理を説明できる（知識） ②青年期という発達段階の特性を、児童期や乳幼児期との対比で説明できる（知識） ③学生（特に新入生）が遭遇しやすい困難について説明でき、自らの教育活動の中で参照できる（知識、技能、態度）	
概要		
Part 1	「そもそも発達とは何か」という問題について考えます。発達と成長はどう違うのか、発達と教育の関係はどのようなものか、発達という視点を持つことで大学や社会がどのように異なって見えるようになるのかといった問題を取り上げます。また、通常の場合に 20 歳前後に生じる発達の質的転換についても説明します。多少なりとも抽象的な話になりますが、お付き合いください。	
Part 2	青年期または学校から社会への移行の時期における発達変化の特徴として、学業に関わる認識のあり方の変化と自己理解のあり方の変化について説明します。	
Part 3	前半では大学生が遭遇しやすい困難として、初年次段階での困難とその背景について説明します。後半では、Active Learning 型の授業に苦手意識を持ちやすい可能性のある学生として発達障害について取り上げます。	
参考文献	中村隆一 2013 「発達の旅—人生最初の 10 年」 クリエイツかもがわ 西垣順子 2016 「青年教育としての大学を拓くために—発達心理学の観点から」 大学評価学会（編）『グローバル人材育成と発達保障の相克—大学は青年とどう向き合うのか—（仮）』晃洋書房 西垣順子 2016 「発達を識っていくということ—発達教育の今日的意義」人間発達研究所（編）『発達研究の創出』群青社 窪内節子・設楽友崇・高橋寛子・田中 健夫 2015 『学生相談から切り拓く大学教育実践：学生の主体性を育む』学苑社	

分 野：「心理学Ⅲ」		テーマ：「臨床心理学の基礎と応用」
講師	徳田 完二（立命館大学）	
到達目標	①臨床心理学的な学生理解と対応の基本を理解し、説明できる（知識、技能） ②大学生の悩みの特徴と回復の基本を理解し、説明できる（知識、技能） ③発達障害（LD,アスペルガー障害等）の学生の特徴を知り、適切に対応する態度をもつ（態度）	
概要		
Part 1	欠席の多い学生を例として、臨床心理学的観点からは学生をどのように理解すればよいのかについて解説し、心理的問題を抱えた学生に対してどのように対応すればよいのかについて述べる。	
Part 2	大学生という発達段階における悩みの特徴を、入学期、中間期、卒業期という段階ごとに解説する。また、心理的不調から回復する過程、およびそれに関わる教員の役割について述べる。	

Part3	アスペルガー障害を含む自閉性障害、注意欠陥多動性障害、学習障害という、主な発達障害の特徴について述べ、アスペルガー障害の学生の特性をふまえた対応の仕方について解説する。
-------	--

分野：「心理学Ⅳ」		テーマ：「発達障害のある学生の学びー自閉スペクトラム症を中心にー」
講師	荒木 穂積（立命館大学）	
到達目標	① 発達障害（自閉スペクトラム症）の定義および現状と歴史について知る。（知識・理解）考える ② 発達障害のある人（自閉スペクトラム症のある人）へのライフサイクルから見た特徴とその生きづらさについて知る。（知識・理解） ③ 発達障害のある学生（自閉スペクトラム症のある学生）への学びの支援について実際を知り、関心を高める。（意欲・態度）	
概要		
Part1	発達障害の一つである自閉スペクトラム症の定義および現状と歴史について知る。自閉スペクトラム症のグループの中には知的障害をとまなわず、大学や職場での支援が必要な人たちがいる。自閉スペクトラム症の歴史、診断基準、出現率、特別支援教育、合理的配慮および自閉スペクトラム症のある人のおかれている現状についての知識と理解を深める。	
Part2	自閉スペクトラム症のある人のライフサイクルについて知る。自閉スペクトラム症のある人の幼児期、学童期、思春期、青年期およびそれ以降の時期における行動の特徴および生きづらさなどの諸問題について知識と理解を深める。また、その特徴である自閉スペクトラム症の「3つ組みの障害」や関係する特性および特性を配慮した発達支援について具体的に知る。	
Part3	自閉スペクトラム症のある学生への学びの支援について、大学での場合を中心に具体例を知り、関心を高める。特に、青年期における「障害」の自己認識、障害表明と自己権利擁護、代理者（代弁者）の役割、大学における個別教育計画（IEP）や個別支援計画（ISP）、進学・就職支援等について知る。また、大学における合理的配慮や障害学生支援室の役割の実際について知り、関心を高める。	

分野：「研究のアウトリーチ活動Ⅰ」		テーマ：「研究者にできる多様なアウトリーチ活動の紹介」
講師	加納 圭（滋賀大学）	
到達目標	①研究者によるアウトリーチの様々な形態をその特徴と共に認識し、自己の目的にあった活動を実行する際の要点を把握する。（知識）	
概要		
Part1	科学コミュニケーション（研究者によるアウトリーチ）の3要素（1. 専門家が科学を伝える、2. 専門家が社会を学ぶ、3. 専門家が社会と協働する）を概説する。	
Part2	「1. 専門家が科学を伝える」が必要とされる背景、及び専門家が科学を伝える活動の実例を紹介する。	
Part3	「2. 専門家が社会を学ぶ」及び「3. 専門家が社会と協働する」が必要とされる背景、及び専門家が社会を学ぶ・社会と協働する活動の実例を紹介する。ここでは、「対話」が重要なキーワードとなる。	

